

一九三七年、五四歳で死去
時に苦しめるほど深い愛情を清子に注ぎ、幸せを願っていた。

父・永瀬連太郎へ

しかしもう私は彼にとどかず
彼も亦私にとどかない。
お互にさびしい自由の中に、なほ強く想ひつ、
私は私の道をはつきり見る。

(さびしい自由の中で)

永瀬清子が書いた 追悼詩

夜の並木道を私が子供のやうに泣いてゆくのに
貴方は何もほどこすすべがない。
僅に私のことを泣くなど叱るばかりだ。

(夜の並木道を)

従兄・内田住夫へ

一九三二年、死去
清子が詩人を志したことを応援し、そのために
必要なブックリストを作り、勉強を助けた。

時はあかるい五月に

師は昇天された。

たちまち姿は

かのか、やく気流の中に消え去られた。

(花の告別——佐藤惣之助師を葬りて)

師・佐藤惣之助へ

一九四二年、五一歳で死去
使い古された言葉ではなく、自分の言葉で書
くことを清子に教えた。

死によつてはじめて愛がわかる。

居なくなつた人はいつでも会える人より、愛しい、かなしい。

あの時、何かを恐れもう一步近よらなかつた失策が、はじめてわかる。

失策、沢山の失策の中に埋れて人間は、私は、やがて死ぬ。

私が居なくなつたら又沢山のことがわかるだろう。「死」があることはきつ

と「わかる」ことのためなのだから——。

(「死によつて」『蝶のめいてい 短章集一』)

一九八四年、八四歳で死去

清子が詩を書くことを許し、陰で支え続けた。

夫・永瀬越夫へ

あなたは私を乱すまいと離れて私をみていた
それがあなたの藍色の愛だったのに
私はそれをまるで思いもしなかつた

(黙っている人よ藍色の霧よ)

一九七六年、六三歳で死去

「美しさを生活する」ことに努めており、

清子は真の詩人と敬愛していた。

詩人・港野喜代子へ

彼女は「スキアラバ」と書いた、
彼女は「カナワヌマデモ」と書いた、
彼女は詩のほかには「生活」を求めなかつた！

(港野喜代子よ眠れ)

「詩とは記憶に値
する言葉の流れ」
ではなからうか。

(「詩とは」
『流れる髪 短章集二』)

私より年若いあなたは
私のおとからついてくると云つたっけね
逆にいまは後から私のゆく道を照射してよ
そしてうしろでヒカっていてよ

(ヒカリさんヒカリさん)

作家・干刈あがたへ

一九九二年、四九歳で死去
清子を慕い尊敬する若き理解者の心に応えぬま
まの別れとなり、無念の思いを強くした。